

平成28年度 第2回高等学校入学者選抜審議会 記録

平成28年11月8日（火） 13:00～15:00
県庁9階 第一会議室

<審議会委員>

柴山 直 委員長, 田端 健人 副委員長, 坪田 益美 委員, 金田 隆 委員,
浅野 純江 委員, 村上 裕子 委員, 伊藤 宣子 委員, 星 豪 委員,
新山 弘幸 委員, 齊 隆 委員, 村上 善司 委員, 猪股 亮文 委員,
長島 勝彦 委員, 吉田 玲子 委員, 村上 礼子 委員, 小林 裕介 委員

<県教育委員会>

鈴木 洋 教育監兼教育次長, 伊藤 正弘 教育企画室長, 清元 けい子 参事兼義務教育課長,
岡 邦広 高校教育課長, 佐藤 義行 仙台市教育局学校教育課長
(欠席: 高橋 仁教育長, 西村 晃一教育次長)

(事務局)	(資料の確認) (公開の確認)
	(開会)
(事務局)	(委員の出席状況の確認)
(教育次長)	(教育監兼教育次長 あいさつ)
(事務局)	(県教育委員会の主な出席者紹介)
(委員長)	(委員長 司会進行開始)
(委員長)	<p>それでは、次第に沿って、始めてまいりたい。 はじめに、(1)の「平成29年度宮城県公立高等学校入学者選抜」について事務局から報告願う。</p>
(事務局)	(事務局より説明) 報告関係資料1
(委員長)	<p>報告(1)について質問があればお願いしたい。</p> <p style="text-align: center;"><特になし></p> <p>それでは、「3 審議」に移る。 (1)「平成30年度宮城県立高等学校入学者選抜方針」と(2)「平成30年度宮城県立高等学校入学者選抜日程について」を審議し、本日中に答申をまとめたい。 事務局から「方針」について説明願う。</p>
(事務局)	(事務局より説明)

(委員長)	「選抜方針」について審議する。 御意見があればお願いしたい。
(伊藤宣子委員)	平成30年度という年度を考えた時に、この受験生が高校を卒業し大学に入っていくというところでは、教育が大きく変わる時期である。学習指導要領も、2020年に小学校、2021年に中学校、2022年に高校、新しい時代の新しい教育という方向で待たなすでうねりが現実のものとなっている。その中で中学3年生の平成30年度の入試。この子ども達が初めての高大接続大学選抜試験に挑戦する。そうするとやはり学びの時間、そして学びの方向性をしっかり踏まえて平成30年度の入試の方針が提示されなければならないと考える。従って、従前の流れで、曜日や日にちで決めていくのは如何なものか。小委員会では何を考えているのか読み込む時間が無い。以上のこと踏まえて慎重に審議したい。
(委員長)	提案ありがとうございます。 他に意見はないか。 ＜特になし＞
(委員長)	なければ、「方針」については案のとおり答申することとしたいがよろしいか。 ＜異議なし＞
(委員長)	では、次に「選抜日程」について審議する。 事務局から答申案について説明願う。
(事務局)	(事務局より説明)
(委員長)	事務局から説明のあった「選抜日程」について審議する。 御意見頂きたい。
(伊藤宣子委員)	提案の理由を伺ったが、平成30年度は現行の入試制度を変えずに、曜日や日数で決定するという事なのか。小委員会でのこの変わり目をどのように理解しているのか。もしくは現行の入試制度がベストであり、前期選抜、後期選抜という形を存続させるという結論に至ったのか。明らかにして欲しい。
(委員長)	事務局から追加説明をお願いしたい。
(事務局)	小委員会では平成30年度の入試体制については検討していない。
(伊藤宣子委員)	平成30年度の入試については、時間が無くて検討していないということか。
(事務局)	小委員会においては今後の入試の在り方について検討するという趣旨で進めている。平成30年度の入試の方針及び日程についての検討は、小委員会の趣旨から考えるとそぐわないので取り扱っていない。従って平成30年度の方針や日程については現行の制度下でどのようにしたらよいかの検討をこの審議会でお願したい。
(委員長)	小委員会における検討内容については、次のところで検討いただくことになっているので、その時に御意見頂きたい。

(伊藤宣子委員)	<p>試験日程は中学3年生の学びの時間を確保するという観点から考えているという話だったが、私学も公立も宮城の子ども達として入試を考えると、この平成30年度の入試は、公立の前期選抜の日程から、早まってしまう。公立だけの入試を考えるものではない。宮城県の中学3年生が受験に挑む日が例年よりも早くなるということ。この点についてはどのように考えたらいいのか。例えば1案だと、1週間の中で私学と公立の入試があるというあり得ない状況になるので、私学は前の週になり、1日ずつ繰り上がっていく。1日ぐらいいいではないかということではない。そのことについてはどのように考えているのか。</p>
(委員長)	<p>今の質問についての御意見をお願いしたい。 スケジュールを見ると平成29年度はBが27日、1案だと26日で1日の違いが生じている。</p>
(伊藤宣子委員)	<p>24日A日程、26日にB日程とすると、28年度と比較すると3日も早くなる。27年度と比較すると1日ずつ早くなる。</p>
(委員長)	<p>詳しい事情を承知していないが、28年度・29年度私学の日程はほぼ同じで設定されているが、公立は29年度2月1日と繰り下がっていて、そのことで何か大きな違いは生じるのか。</p>
(伊藤宣子委員)	<p>2月1日にしても、その週に私学のA日程・B日程が入ってくるとなると、入試が1週間の中で3回も行われることになる。これは受験生にとってあり得ないことなので、私学の日程がそのようになっている。平成30年度の暦は難しい暦である。 例えば、案1だと公立が31日なので、29日にB日程、25日にA日程となる。そうすると、公立と私学が1週間のうちに2回試験があることになる。案2でも同じことが生じる。カレンダーの状況がこの様なので、公立が2月になってもそうになってしまうのは致し方ない。中学校の先生達が生徒達の現状を見て、2・3日早くなったとしてもやむを得ないと考えられるのであれば、問題は無いかと考える。従って、中学校の先生方の御意見を伺いたい。</p>
(委員長)	<p>この件に関して中学校の先生方からお願いしたい。</p>
(新山弘幸委員)	<p>1回目の会議の時にも1週間に複数回試験を受けるのはかなりの負担であるという話があった。中学生の現状を見ると、前期選抜と私学の受験に向けて準備するのはかなりの負担があると考ええる。但し、カレンダーを見るとなかなか難しい。私学の日程を前倒しするのも厳しいし、公立の日程を下げると、前期の合否判定からの不合格の生徒に対しての進路指導が期間が短くなるほど困難になる。単なる進路指導ではなくケアも必要となる。妙案は無いが、私立との日程を変える方向で考えた場合でも、私立の前の週に前期の日程を組んでも窮屈になると考える。</p>
(委員長)	<p>齋委員、何か御意見はないか。</p>
(齋隆委員)	<p>平成30年度の日程に関しては案3がいいと考える。1月いっぱい学習の期間として使える。公立の日程が決まると、私学からすれば有無を言わず決まってしまうところがあるので、29日から2日の中での火・木で私学の入試をしてもらえれば、中学校としては冬休み明けから3週間は時間がとれる。授業もできるし、進路に向けての心構えもある程度できて入試を迎える。私学と公立の入試が続くことには変わらないのだが、私学の入試まで余裕があるという点で、案3がいいと考える。案4だと前期選抜の合格発表の後の後期への出</p>

	願の期間が日数が少ない。そこで迷う生徒にとっては中途半端な状態で後期入試の出願をしなければならない。結果的に受験生を追い詰めてしまう。案3であれば日程がとれるので有利である。後期選抜については案1から4まであまり日程に差が無いので、前期選抜を中心に考えると案3で、余裕を持って受験できると考えた。
(委員長)	カレンダー上、いずれの案においても矛盾が生じている。案3・4においては事務局からの説明にもあったとおり、外せない制約条件があり、確かに3・4案ではA・B日程うまく入りそうだが、後ろの日程において別の所にしわ寄せが来るように思われる。いろいろな制約条件を考えていくと現行制度においては矛盾が生じてしまうということで、あっちを立てればこっちが立たずだが、全体を見ると、案1が最適であると考えられるのではないか。
(伊藤宣子委員)	委員長が言ったとおり、あちらを立てればこちらが立たずだが、あちらとは、こちらとは何を指すのか。やはり、中学校の子ども達を中心に考えるべきである。現行の入試制度はその前の推薦入試に付随する問題点を解決するためにできたものであると解釈している。それはそれで良かった。しかし時代がスピーディーに変化している。この時代の中で、現行の入試制度はベストなのか。限界が来ているのではないだろうか。小委員会では平成30年度について検討しないのであれば、平成30年度を見据えると、1案ではなく、3案だと考える。これは子どもを中心に考えたこと。但し入試事務処理等に関して、間違いの無い処理をと考えると、こちらが立たずになってしまう。そう考えると、現行の制度には問題があると考えが必要が生じてきているということで、この検討をする時期に入っていると考える。
(委員長)	現行の制度の下で考えると伊藤委員の提案も案3であると理解した。かなり難しい問題で、原案を作るにもかなり検討を重ねたのではないかと思うが、1案と3案、どちらがよろしいか御意見を頂きたい。
(村上善司委員)	日程に関する話で終始しているが、この審議会では生徒の負担と事務的な負担のどちらを重視するかということをお問いたださなければならない。答えは明確であると考えているが、そこから派生する事務的な負担をどう解決していくかは中学校や高等学校からの意見を踏まえて検討することになるが、ベストな案はないと考えている。最大公約数的なものでもいいので、とりあえず平成30年度に関してはそのように考えないといけない。4案については先ほど説明があったとおりだと思うが、審議会において基本的なことは何なのか、それを踏まえてこの様な結論を出した、という形にすべきである。中学生からすると、特に当地区の生徒からすると、1日の違いは大きい。可能であればゆとりのある中で生徒達と向き合いながら進路指導をしていきたいという声も聞こえてきている。
(委員長)	当然最優先は子ども達である。それは揺るぎないもの。更に御意見頂きたい。
(長島勝彦委員)	いずれの意見ももつともだと思う。しかし現実の問題として、3案と4案にある入試後4日の処理期間は高校側にとってかなり厳しい。採点などを含め入試の事務処理ではかなり細かい部分までの精査や正確さが求められており、現在の5日でも足りないと考えている学校も多い。それが更に4日に短縮されるとなれば、これまで以上に教職員に過大な負担がかかり、事務処理ミスなどのリスクが増すことは避けられない。 また、後ろに前期入試日が下がると、今度は定期考査や卒業式等の学校行事との関係もあり、高校側にとって日程的に困難な対応を迫られことが予想され

る。確かに入試までの中学生の授業時間の確保と私学の入試日程の設定といった面で利点はあるかもしれないが、高校にとって、実際に目の前にいる在校生への指導も大切であり、3案と4案では各学校の教育活動に大きな支障を来すことも考えられ、対応が非常に厳しいと言わざるを得ない。

(委員長)

高校における事務処理の問題から、今度は高校生へのしわ寄せに関する意見が出た。どちらにしたらよいのか非常に難しい問題である。

(齋隆委員)

先ほど、案3でと申し上げた。付け加えて説明したい。中学校においてできるだけ授業日数を確保することは、3年生にとっては必要である。1・2年生に比べて3年生は元々授業日数が少ない。標準時数を確保できているのか。文科省からは時数を確保して学力の向上を図ること、県の学力向上対策でも学力をつけるためにはある程度時間の確保も必要だと、至上命題のように出されている中で、中学校3年生の日数を減らす方向で検討するのは好ましくない。1月いっぱい授業確保について尊重願いたい。前回申し上げたが、処理に間違いを起こさないためには、高校側の対応する人数を増やすことで対応できないものか。

中学校側の問題として、チャンスが増えるから有効に活用するということがあるが、前期選抜の条件をクリアしたということだけでなく、出願資格を得られたということだけであるということ、受験生とその保護者に理解を促すことが必要である。また、前期選抜では中学校1年生からの成績の積み上げが評価される。視点を変えると、2年生・3年生になってからの頑張りが評価されない入試制度であるということは、次の検討委員会の中で改善して欲しい。ある時になって火がついた子ども達が頑張りだしたときに、時すでに遅しとならない入試制度にしたい。様々な観点から評価される社会を生き抜く子ども達に対して、現状の観点での評価でいいのかということもある。少なくとも平成30年度は現行の体制で行くのならば、授業日数の確保を大事にし、それが学力の確実な定着に繋がるように配慮して欲しい。事務処理等については大人の問題なので、そこはうまく対応してもらい、タイトな日程が故に中学生が思わぬ負担を強いられないように、日程に配慮して欲しい。

(委員長)

アセスメントの話は本当に大変である。丁寧に見ようと思えば思うほど時間は当然かかる。入試には公平性・公正性、それからミスがないということが重要な条件。中学生にも高校生にもどちらをとってもしわ寄せが来る。条件を絞ってくると見えてくることもある。高校側の意見として、現在の5日を4日に、あるいは人的な面に対応できるのか意見を頂きたい。

(村上礼子委員)

5日間という日程でさえも本当に厳しい。全職員で対応している。入試に関わらない者は一人もいない。教科関係なく対応している。3審、場合によっては4審まで行っており、全て公正か確認をしている。それを時間制限というプレッシャーの中で行っている。採点という性質上、その都度話合い、採点基準を検討し採点している状況なので、5日間という日程でも非常に厳しい。休日も返上しなければならない状況もこれまで想定してきた。ミスがあった場合の対応のため待機もしてきた。従って5日間でも本当に厳しいということを理解いただきたい。

高校においても1月の末は大事な時期である。センターが終わった後2次試験に向けての指導、3年生の卒業に向けての指導等がある。かといって日程を後ろに下げると、在校生を含めた進級認定の対応や、後期選抜の準備、これが二次試験まで続き23日以降ということになると、新1年生の準備ができなくなる。以上のことを考慮すると、現行の制度においては、後ろに下げるとは厳しいと判断する。

	<p>昨年、県の校長会でも、中学校においても高校においても大きいな問題があるということは共通して認識しているところであり、アンケート調査等もして頂き、できるだけ早くこの入試制度の一定の価値を認めつつも変えなければならない部分については検討して欲しいとお願いしている。現行の制度の中であれば1案が妥当だと考える。高校において事務処理についてはきちんとやっていることを理解いただきたい。大人の仕事ではあるが4日では不可能である。</p>
(伊藤宣子委員)	<p>長島委員と村上委員の意見は私も高校現場にいるので大変よく理解できる。教育界はこの制度を作ったときと大きく変わっている。この制度そのものに問題が生じてきたのだという共通認識を持てるのではないかと考える。高校生は大学や就職に向けて勝負する時期。中学生も同様である。この制度と学校現場に対する社会の求めも大きくなってきている。時間をかけなければならぬ、時間が欲しいという状況の中で、この良き制度も終わりの時期を迎えているのではないか。新しい制度を生み出す組織運営展開が必要なのではないか。</p>
(委員長)	<p>伊藤委員の御指摘はもっともであり、その点については現在小委員会で検討しているところである。</p> <p>なお、現行制度において実施するとすれば、今日答申を出さなければ入試が進まない。それぞれの意見は尊重するし、子ども達の顔を思い浮かべるとどの案を選択していいのか迷うが、私から案1を提案させて頂きたい。中学生・高校生のことを総合的に考えて、平成30年度の日程については事務局から出された案1ということによろしいか。</p>
(伊藤宣子委員)	<p>その提案に対して条件を付けさせて欲しい。真剣に宮城県の入試制度を検討して行くが、平成30年度はこれではいけない、というのであれば致し方ないと思う。しかしながら、ずるずると継続するのはやりきれない。全国の私立中学校連合会で全国の入試システムがどうなっているのかをまとめたものがある。この資料を提供したい。どこの県においても高校入試についてはよく考えている。18歳主権者教育をする場であることに加え、中学から高校までの6年間は非常に大きな成長期にあることから考えて、高校入試をよく考えていることが分かる。平成30年度の提案については、入選審のメンバーとしてその後どうするのかという方向性を見据えての決の採り方に参加させて欲しい。</p>
(齋隆委員)	<p>委員長の提案は分かるが、今の1年生が受ける入試である。ここ2・3年の間に新学習指導要領の改定の方が明確になる。学校現場でもそれに合わせて教科書が大きく変わらなくても、指導内容等で授業の中身が変わってくる中で3年生になる子ども達の試験であるということを念頭に置く必要がある。</p>
(委員長)	<p>高大接続システム改革においても非常に議論になっている点である。齋委員と伊藤委員の発言を生かし、真剣に次のシステムを検討することとし、平成30年度に限っては、案1でやむを得ないということで提案したいが如何か。</p> <p style="text-align: center;">＜異議なし＞</p>
(委員長)	<p>それでは、様々課題があり悩ましいが、平成30年度入学者選抜日程は、今後の制度を真剣に考えていくこととし、案1のとおり答申することとする。</p> <p>これで方針と日程の審議を終わりとする。</p> <p>答申の準備をお願いします。</p>
(事務局)	<p>準備します。</p>

(委員長)	それでは答申をしたい。準備があるので時間を頂きたい。
(事務局)	今答申に向けて準備をしているところだが、手続きに入る前に事務局から1点だけ話をさせて欲しい。よろしいでしょうか。
(委員長)	どうぞ。
(事務局)	御意見をまとめて頂き感謝する。ただ今の御意見の中で平成30年度に限ってはということがあった。この後話題に出てくるが、前期・後期のシステムでの入試は平成30年度はこのまま継続し、それ以降どうなるかということについては、これからの検討の中で出てくることである。入試については子ども達を中心として子ども達のためにどうあるべきか、これは在校生も含めてということで御意見を頂いたところだが、今後も精査しながら改善をしていくものと認識している。但し現在の制度が進行していった場合、先ほど平成30年度に限ってという話を頂いたが、平成31年度以降どうなるかということについては、今のところ不透明である。今後の流れによって更に努力は重ねていくが、その点について御理解をいただきたい。
(委員長)	今の説明については、確かに制度が必ずや変えられるかという点、これまた慎重な審議を必要とすることから、先ほど「限って」という言葉を付けたが、「平成30年度は」ということでよろしいか。 ＜異議なし＞
(委員長)	それでは「限って」という言葉を取り下げる。
(委員長)	準備ができたということなので、答申文を確認の後、答申する。方針及び日程について確認したい。ただ今配付された答申文を御覧頂きたい。 それでは、皆さんで答申文の確認をお願いする。 (答申文の確認)
(委員長)	委員の皆さん、答申の文言はこれでよろしいか。 ＜問題なし＞
(委員長)	それでは答申の提出に入りたい。
(委員長)	(答申鑑読み上げ)
(教育監)	(答申挨拶)
(委員長)	答申については以上で終了する。休憩を入れたい。10分休憩する。
(委員長)	再開する。 審議(3)「今後の県立高等学校入学者選抜の在り方について」について検討する。これまで小委員会でも検討を重ねてきた。ここまでの3回の検討経緯について小委員会座長の田端副委員長から説明願う。

(田端副委員長)	これまでの3回の会議を経て、中間まとめを(案)として集約した。この経過については事務局にまとめて頂いているので、事務局から説明願う。
(事務局)	(報告関係資料について説明)
(田端副委員長)	<p>専門委員から補足はないか。</p> <p style="text-align: center;">＜補足無し＞</p>
(田端副委員長)	<p>では私から小委員会での3回の議論を踏まえて「中間まとめ」策定に向けて本日(案)としてまとめたものを説明する。</p> <p>小委員会では宮城県立高等学校入学者選抜制度の今後の在り方について議論を重ねてきたが、それについて、今回中間まとめ(案)を作成した。先ほどの30年度入試に関する議論も、当然小委員会の中で話題となり議論を重ねた。まず、別冊資料を御覧頂きたい。</p> <p>中間まとめ(案)冊子の表紙からページをめくると、冒頭に「はじめに」を置き、入学者選抜制度の基本的理念を再確認し、今回の検討が何故必要なのか、これまでの経緯も踏まえ、現行制度の成果と課題を、時代の大きな流れを踏まえた大所高所から位置付けている。</p> <p>次に、目次のページを御覧願う。本まとめ(案)の全体構成についてだが、小委員会において中間まとめの柱立てについて議論した結果、大きく4部構成がふさわしいという結論で一致した。</p> <p>第1部では、現行入学者選抜制度の現状と課題を整理し、第2部では、現行制度に関する調査の結果を考察し、そして、第3部では、1、2を踏まえ、今後の入学者選抜の在り方について改善の方向性を示すという構成である。そして最後に第4部として、改善の方向性だけでなく、議論のたたき台となるように改善の方向性を踏まえた改善試案を提案し、小委員会で検討した入試制度の枠を3案示している。</p> <p>次に、本文の内容を説明する。</p> <p>1ページから御覧頂きたい。</p> <p>「1 宮城県立高等学校入学者選抜制度の現状と課題」についてだが、(1)では、これまでの入学者選抜制度の変遷と現行制度の概要を整理した。その上で(2)に現行制度の課題について小委員会が議論の観点とした3点、すなわち①入試期間の長期化、②特色ある選抜、③入試事務の在り方の3つの観点からこれまでの論点を整理した。</p> <p>次に「2」としまして入学者選抜制度に関する調査についてまとめている。</p> <p>(1)は県内全ての中学校、高等学校等を対象に実施した質問紙調査の結果について検証し、「ア」として旧制度からの変更点の効果等をまとめ、「イ」として現在の入試制度の課題等を評価しまとめた。さらに5ページから6ページにかけての(2)では、もう一つの調査として、みやぎ学力状調査の質問紙調査の結果について、高校1年生に対し、自分が経験した高校入試を振り返ってもらった結果を盛り込んでいる。同調査では、高校2年生にも同じ調査を行っているが、入学後まる1年経過しているということもあり、その結果については高校生活の影響が含まれていると判断し、入試制度を評価するにはあまり参考にならないと考え、直近の経験者である高校1年生の結果のみを記載することにした。また、7ページの(3)その他として、これから入試制度を改善して行く上では、広く県民の御意見も聴取すべきであると考え、パブリックコメントや意見聴取会の開催も視野に入れて今後検討を進めていく必要があると提案している。</p> <p>以上の1と2、つまり入試制度の現状と課題、学校現場の意識等を踏まえた</p>

上で、今後の入試改善の方向性ということで3として今後の県立高等学校入学者選抜の在り方についてまとめた。

まず、(1)としまして、入試改善に向けての基本的な考え方を再確認している。要約すると、①受験生にとって、より公正かつ適正な入試とすべきこと、②中学校と高等学校の教育を円滑に繋ぐ入試とすべきこと、③これからの時代に求められる力の育成に資する入試とすべきこと、の3点である。

特に③については、これまでの改善についても重視されてきた学力の向上について、いわゆるペーパーテストの点数だけではなく、広い意味での社会を生き抜く知恵、個人と社会を幸せにする知恵という考え方も含めた学力という考え方である。その上で(2)において、今後の改善の方向として3つの観点からまとめた。

まず、①適正な入試期間の設定について、調査結果や委員の皆様からの意見によると、一定の成果が現行制度に認められるものの、中学校の進路指導や高等学校の教育活動の充実という点で、いくつかの大きな課題があること。また、中学校と高等学校への調査の事由記述欄の結果からも改善すべきとの意見が多く、しかも、中学校と高等学校の教育活動の根幹に関わる課題があるとの意見から、小委員会ではスリム化の方向での見直しが必要であるとの提案で意見の一致をみている。そこで、スリム化の方向性での制度変更として、自ずと導き出せるのが、現行制度の前期・後期の期間を短縮し、制度の内容をスリム化するか、あるいは、現行制度の成果を生かしつつ前期・後期を一本化するかが議論の1つの分かれ目になり、今後一層踏み込んだ議論をすべきとの意見で一致した。

次に、②特色ある選抜の在り方については、まず各高校が求める生徒像や出願できる条件を示したことで、客観性・透明性に関して、現行制度には効果が認められることを再確認している。現行制度は高等学校における特色ある学校づくりや中学校における主体的な進路選択にも効果が認められている。その一方で出願できる条件の曖昧さが指摘され、また、条件に合うか合わないかを中学生あるいは保護者が意識するあまり、「入りたい学校」ではなく「受験できる学校」を生徒が選択する傾向も少なくないこと、また、入試のための中学校生活になっている生徒もいるなどの課題も多く、この点でもさらに検討が必要であると考えている。

また、大きな課題として議論されたことに、前期選抜の定員の少なさ、連動して倍率の高さがある。そのため多くの生徒が、前期選抜で不合格となり、そうした生徒の多くが、後期選抜でも同じ学校を受験し、合格するという状況が指摘され議論した。

さらに、地域によっては経済的に困難な家庭も多いことも議論し、こうした家庭の子供にとって入試機会が多い方が良いのかどうかについても検討した。

もう1つの大きな課題として、入試事務作業の膨大化、長期化も議論しました。入試事務の膨大化と長期化は一方では教員の過剰な負担となっていること、しかしもう一方では、入試事務に教職員のエネルギーが割かれることにより、中学校でも高等学校でも生徒達への本来の学習指導を含めた教育活動に支障をきたすということになっている状況も議論した。

以上を踏まえ、受験機会の確保については、回数としては学力検査を1回にまとめ、受験生の機会としては選抜のしかたを複数確保することで、これまで通り機会を2回確保するという方向性も現実的に可能で有り、現行制度の改善につながるという議論をした。

③入試事務の在り方については、出願できる条件の曖昧さが招く確認作業の煩雑さや、入試期間の長期化に伴う多忙化、在校生に対する授業時数の確保が困難な点等に課題があり、それぞれの学校の教育活動に及ぼす影響が大きく、①、②に関連する部分もあることから、総合的に改善に向けた検討が必要であると考えている。

最後に改善試案として、入試日程のフレームを3案示している。小委員会では入試期間を短縮するというスリム化の方向性で意見の一致をみているので、3案とも現行の入試期間よりも短縮した日程を設定している。

A案については、現在の前期・後期の2つの選抜について、日程的に一本化を図るもので、学力検査を1回にまとめ、複数の選抜機会を確保するものとなっている。入試日程を一本化となった場合、入試の倍率が2倍、3倍になって、不合格となった受験生が、第二次募集しかないという状況は避けなければならない訳だが、これはこの先の議論のテクニカルな部分になってくるので、この点は十分に検討しないといけないと考えている。その際、現在実施している予備調査等をどのように位置付けていくかということも今後の検討の材料になってくるものと考えている。

なお、これは、前期・後期型から一本化型に制度変更した青森県の入試制度を参考にしながら検討を重ねてきたものである。そこで簡単に、青森県の例を御紹介したい。

参考資料の11ページを御覧頂きたい。

青森県の1回の入試で、選抜を2回行うということについては、私自身理解するのに少し時間を要した。この制度について、委員の皆様にも、そして県民の皆様にも、しっかりと冷静に理解した上で、検討の材料として頂きたい。

青森県は、選抜方法を2つに分けて、一般選抜と特色化選抜にしている。この特色化選抜が、宮城県が現在実施している前期選抜に、そして、一般選抜が後期選抜にあると理解している。入試としては、一般選抜と特色化選抜を一度に行うのだが、どちらの選抜を先にするか、後にするかは、学校毎の判断になっている。そして、一般選抜と特色化選抜の募集定員も各学校で決めているという状況である。詳しいことについては、時間の制約もあることから、12ページの具体例にお目を通し頂きたい。

次に、B案についてだが、現行の前期選抜・後期選抜を出来るだけ後ろにずらして実施する案として、1月の下旬から2月の上旬を生徒の授業時間として確保する形での期間の短縮化を図る案となっている。

これは、先ほどの平成30年度の入試日程についての議論でも、課題としてあったように、第二次募集までの日程を考えれば、学校の教育活動や入試事務の大幅な見直しが必要になってくると思われる。

C案は、現在の前期選抜の所では、特色化選抜は普通科以外の専門学科でのみの実施とし、普通科は一般選抜の方で募集するといったイメージである。しかし、これまでも全ての高等学校で特色ある選抜を行ってきた宮城県としては、特色ある選抜というものを普通科以外でのみ実施するということになるので、かなり急激な変更を加えることになるので、小委員会では検討はしたものの、あまり現実的ではないと評価している。これは、参考資料にある奈良県の例を検討したものである。

いずれの試案においても、5教科の学力検査を実施することや特色化選抜を実施するという点で共通している。また、現行制度で効果があると評価している部分については、何らかの形で継承しながらも、受験生の進路意識の向上であるとか、授業時数を確保し、学校の教育活動の充実を図るという点も共通の特徴となっている。

本日は、小委員会として審議会にお示しするこの3つの試案について、大枠について確認して頂き、見込まれる成果や課題等についても、委員の皆様から御意見を頂ければと思っている。

この中間まとめ(案)については、審議会に対して諮問された内容を踏まえ、それに応じうるまとめとなっていると考えている。各委員の御意見をよろしくお願いする。

以上である。

(委員長)	「中間まとめ」(案)の具体の審議の前に、検討経過について何か質問等はないか。
(伊藤宣子委員)	今の報告を伺って、感謝申し上げたい。全国の入試制度をここまで検討して頂き、そして宮城県の子どものために時間をかけて検討頂いたことに感謝申し上げます。これからは期待したい。
(委員長)	では、「中間まとめ」(案)について議論していきたい。項目に沿って進める。全体の構成については報告関係資料の15ページにある「中間まとめの柱立て」にそってまとめている。構成についてはいかがか。 ＜異議なし＞
(委員長)	それでは内容について見ていく。「はじめに」について何か御意見はないか。3行目の「適正」は「適性」ではないか。誤字と思われるので修正願う。 ＜特になし＞
(委員長)	では「はじめに」については原案どおりで進めることとする。 次に「1 県立高等学校入学者選抜の現状と課題」について御意見・質問等をお願いしたい。 ＜特になし＞
(委員長)	では「2 入試制度に関する調査の結果」に移る。この質問紙調査はかなり包括的なものである。 ＜特になし＞
(委員長)	何もなければ「3 今後の選抜の在り方について」についてお願いしたい。検討における主な意見も箱書きの中にまとめている。 ＜特になし＞
(委員長)	それでは最後の「県立高等入試の改善試案」についてお願いしたい。3つの案を並列して提示してある。
(伊藤宣子委員)	先ほどの説明で「C案は現実的でない」という説明があったが、C案は案として提案しないということか。
(田端副委員長)	提案はする。いくつかの可能性を検討するという意味で、奈良県をモデルとしたC案も提案するが、小委員会の評価としては宮城県のこれまでの経緯には沿わないという評価を込めて提案するということである。
(委員長)	他に何かあるか。 では、「中間まとめ」(案)のたたき台ということで確認頂いたが、これでよろしいか。 ＜異議なし＞
(委員長)	それでは、これからは意見が出てくるかもしれないが、とりまとめについて

は私と事務局に一任いただきたい。了解願いたい。

<異議なし>

(委員長) できるだけ早く修正を終えて、完成したものを、本審議会の「今後の県立高等学校入学者選抜の在り方について(中間まとめ)」として、県教育委員会教育長に報告したい。

最後駆け足になって申し訳なかった。ここまでの議論感謝する。また、本日の向けての小委員会での検討についても感謝する。また、小委員会での引き続きの検討をよろしく願いたい。本日の審議会の前半部分でもいくつかの御意見を頂いたので、そのことも十分に念頭に置いて小委員会を進めて欲しい。では、今後の検討スケジュールについて事務局から説明願う。

(事務局) (スケジュールについて説明)

(委員長) スケジュールについては事務局からの説明のとおりである。今日の段階が最終答申に向けてちょうど中間地点である。これからも協力願う。

今後の県立高等学校入学者選抜の在り方についての審議は以上とする。予定の議事はここまでだが、各委員から何かあるか。

<特になし>

(委員長) 事務局から何かあるか。

(事務局) 本日の審議を踏まえてできるだけ早く委員長から教育長に報告してもらえるように進める。関係各所に通知するとともにHPにも公開する。同時にパブリックコメント等も行いながら広く県民からの声を聴き、準備を進める。

次回の審議会は来年の2月を予定している。小委員会では更に踏み込んだ議論をして「答申案」を検討する予定となっている。2月の審議会ではその「答申案」の検討を願いたい。正式な日程等については後日案内する。

(委員長) 次回は来年2月である。
本日の審議はこれまで。進行を事務局にお返しする。

(事務局) (進行の交代)
(閉会)